会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
41(2): 231, 1994

Announcement—Larval Fish Conference to be held in Sydney, June 1995

An International Larval Fish Conference will be held in Sydney at the University of Sydney and the Australian Museum 26–30 June 1995 with the annual meetings of the Australian Society for Fish Biology (ASFB) held the following weekend (1–2 July). Several symposia will be held as part of the Conference (see below). There will also be contributed papers sessions. The ASFB meetings will include papers on a broad range of fish and fisheries topics, and participants in the Larval Fish Conference are encouraged to attend.

A first circular for the Larval Fish Conference will be issued in June, with the second circular late in 1994 and it is likely abstracts will be required in the first three months of 1995.

For information on the symposia or workshop, contact the convener(s) directly. For other information on the conference, or to receive the first circular, contact: Jeff Leis (Australian Museum, PO Box A285, Sydney South 2000); Mike Kingsford (Department of Zoology A08, University of Sydney, Sydney 2006); Tony Miskiewicz (Environmental Projects Group, Waterboard, P. O. Box A53, Sydney South 2000); or Charles Gray (Fisheries Research Institute, PO Box 21, Cronulla, 2230).

Intrenational Larval Fish Conference, Sydney, June 1995: Symposia and Workshops (titles are tentative, as is participation of some conveners, pending funding)

Symposia

Contrasting larval biology (from different environments)
Convener: Peter Gherke, Fisheries Research Institute, Sydney, and John Govoni, National Marine Fisheries Service, Beaufort

Population dynamics & oceanography
Conveners: Mike Kingsford, University of Sydney, and Robert Cowen, State University of New York, Stony Brook

Development and behaviour (including sensory abilities)
Conveners: Maria Milicich, James Cook University, Townsville, and Lee Fuiman, University of Texas, Port Aransas

Condition and growth
Conveners: Iain Suthers, New South Wales University, Sydney, and John Kalish, Australian National University, Canberra

Biology of *Pomatomus saltatrix* larvae in two hemispheres
Conveners: Tony Miskiewicz, Water Board, Sydney, and John Hare, State University of New York, Stony Brook

Aquaculture
Conveners: Steve Battaglene, Brackish Water Fish Culture and Research Station, Salamander Bay, NSW, and Joan Holt, University of Texas, Port Aransas

Fish larvae and systematics: ontogeny and relationships
Conveners: Jeff Leis, Australian Museum, Sydney, Muneo Okiyama, Ocean Research Institute, Tokyo, and John Olney, Virginia Institute of Marine Science, Gloucester Pt.

Workshop

Ichthyoplankton research for fishery science—Fishery-free methods for estimation of population size and extent
Conveners: Rich Fletcher, Western Australia Marine Research Labs, North Beach

(Jeffrey M. Leis: The Australian Museum, P.O. Box A285, Sydney, NSW 2000, Australia)

魚類学雑誌
41(2): 231–234, 1994

徳島県立博物館の紹介

徳島県立博物館は，自然・人文部門からなる総合博物館である．徳島市街から南西 4.5 km の緑豊かな丘陵に広がる徳島県文化の森総合公園内にある．博物館では

「郷土に根差し世界に広がる博物館」,「開かれた博物館」,「研究を大切にする博物館」,「文化財を守り自然の保全をめざす博物館」の4つのスローガンを掲げ活動している．開館して間もないため，特に目立ったコレクションなどはまだないが，ここでは実情をおり混ぜて当館の紹介をしたい．

当博物館を含む「文化の森」は，徳島置県100年を記念して1990年11月に開園した複合文化施設である．博物館の他に近代美術館，図書館，文書館，および文化情報センター・施設管理センターとしての機能をもつ21世紀館が，総面積40.6 haの敷地の中に置かれている．これまでわが国でも，同じ公園内に複数の文化施設を設置する例はいくつか見られたが，「文化の森」では，さらに一歩進めて，各施設の相互利用や一体利用をはかり，複数の施設による総合的な企画の催しなどを通じて，県民にこれまでにない新しい文化情報を提供することをめざしている．例えば，博物館や美術館へ来て，疑問に思ったり，もっと詳しく知りたいと思ったことを，図書館で自分で調べるといったことができる．逆に，外の公園に遊びに来たついでに博物館にも入ってみるといった，肩肘張らない利用もできる．とにかく，子供連れの家族がやってきて，一日暇をつぶせるのが「文化の森」の特色である．

この試みはうまくいったようで，1993年度までの約3年半の間の延べ入園者数は280万人を越えている．博物館だけでも46万人で，開館時より毎年減少傾向にあるものの，1993年度で9万4000人の利用者があった．大都市の博物館から比べたら，この程度の入館者数は珍しくないかもしれない．しかし，徳島県の総人口がわずか83万人であること，市街地からやや離れた場所にあること，近畿圏のみならず，四国の他県からも地理的に隔離されているため，県外利用者の割合は小さいことなどを考え合わせると，地方の博物館でこの人数はまずまずといえるのではないだろうか．人口当りの利用率はかなり高い方でないかと思う．しかし，博物館単独館であったならば，とてもこれほどの入館者数は望めなかっただろう．

「文化の森」の一施設である博物館は，近代美術館と21世紀館とが一体となったコの字型の建物の一角を占めている（図1）．延べ床面積は8133 m²で，県立博物館の規模としては中程度である．しかし，この面積は博物館占用部分だけのもので，この他にもエントランスホール，講演会や学会などに使用する300名収容のイベントホール，AVライブラリー，コンピューター室，ミュージアムショップ，レストラン，機械室などの共用スペース

図1. 徳島県文化の森総合公園の三館棟の全景．右側のかまぼこ屋根部分が徳島県立博物館，左の同形部分が近代美術館，中央部分が21世紀館．

が21世紀館の管轄となっていることを考慮すると，博物館スペースは実質的には10000 m²を越えている．

研究室における学芸員の一人当りの占有スペースは，机・書棚を含めて8 m²余りで，少々狭い．欲をいえばこの2倍は欲しいところであるが，研究室内の共用スペース以外にも，標本作成室，飼育室，分析室，X線撮影室，電子顕微鏡室など，十分な広さの作業スペースがあるので，余り文句はいえない．

ただ，魚類標本を保管する液浸収蔵庫が狭いのは問題である．広さは100 m²しかなく，これ以外に大型の液浸標本を収蔵するためのスペースもない．生物収蔵庫（乾燥標本），歴史民俗収蔵庫，考古収蔵庫などが350 m²以上，地学収蔵庫が約200 m²あるのに比べると，かなり狭いといえる．このような事態になったのは，施設の設計時に液浸標本を扱う学芸員が一人もいなかったからである．筆者が着任した開館2年前の時点では，すでに設計が終わっており，変更は不可能であった．しかし，当初，固定棚を予定していたのを移動棚に変更してもらえたので，2リットルの塩ビ管に換算して約15000本が収蔵可能である．その他に，未整理標本の一時的保管などのために，壁際に固定棚を置いている．なお，当館の収蔵庫はすべて24時間空調で，液浸収蔵庫では夏期で23°C，冬期で20°Cに設定してある．保存液は原則として70%エタノールを用いている．

「文化の森」全体の職員数は，141名（うち正規職員78名）で，その他に警備，機械・設備管理，清掃などの常駐の委託要員や土・日対応の展示解説員などを含めると約200名となる．博物館の職員数は41名で，これらうち19名が正規職員である．その内訳は，事務3名，教員2名（普及担当），学芸員14名（自然課7名，人文課7名）

となっている（館長は非常勤）．中でも事務の3名は，他の県立博物館と比較すると非常に少ないと思われるかもしれない．しかし，施設と同様，情報サービスや施設の管理，警備，清掃などに係わる事務はすべて21世紀館の管轄となっているので，実質的な職員数はもっと多いといえよう．

自然課学芸員の担当分野は，地学（2名），植物（2名）および動物（3名）に分かれている．動物担当各人の守備範囲はそれぞれ，昆虫，その他の無脊椎動物，および脊椎動物という，ほとんど気の遠くなりそうな範囲となっている．筆者は脊椎動物担当学芸員であるので，当然，魚類だけでなく，両生・爬虫類，鳥類，哺乳類に関する業務をこなさねばならない．ただし，魚類以外に関しては，交通事故などで不幸にして死亡した鳥獣などを引き取るといった受動的な収集しか行っていないため，それらの業務に取られる時間はそれほど多くはない．

なお，勤務時間は午前9時から午後5時30分までであるが，警備要員が24時間常駐しているため，何時まで居ようが自由で，届出など一切不要であるのは有難い．休館日の出勤もまったく差し支えない．電話やファックスは直通であるため，いつでも使用可能である．ただし，コンピュータによる通信は午前9時30分から午前0時までとなっている．

博物館の事業は，展覧，調査研究，資料収集保存，普及教育，および国際交流の5本立てとなっている．これらの事業を運営する予算は，開館した年を除くと，毎年約1億5000万円（職員の給与を除く）で，うち4000万円が資料購入に充てられる．予算についても，施設の大きさや職員数と同じで，施設自体の管理費や他館との共用部分の運営費などを含まないため，実質的にはもっと多いといえる．

魚類に関する業務としての調査研究は，徳島県の地域魚類相の解明を中心に調査を進めている（業務が地域的なものに限定されているわけではない．原則としてどんな研究テーマでも予算化は可能である．ただし，予算獲得のテクニックとしては，こじつけでも地域や展示に引っかけた方が通りはよい）．残念なことに，県内の大学に理学部や農学部がなかったせいもあって，四国の他県と比べて魚類相が不明の河川や海域が多い．中でも淡水魚の調査を優先している．と言うのも，1998年完成の明石-淡路島間を結ぶ明石海峡大橋の完成を睨んで，各種の開発プロジェクトが目白押しだからである．海域が影響を受けないわけではないが，特に淡水魚の標本の収集が急務となっている．現在までに，徳島市街地の汽水域，「文化の森」のすぐ前を流れる園瀬川水系，吉野川河口域，および県南の海部川水系の調査を行った．今年度からは3年計画で河口域を除く吉野川水系の魚類相調査を行う予定である．海産魚についても，淡水魚同様，徳島県沿岸の魚類相に関する報告はほとんどない．徳島県は播磨灘，紀伊水道，太平洋のそれぞれ海況の異なる3海域に接しており，それぞれに魚類相が異なることが予想される．紀伊水道にしても，黒潮分枝流の流路や河川水の供給量の違いなどから，対岸の和歌山県沿岸の魚類相とはかなり違うことが予備的な調査から分かっている．しかし，現在までのところ，県南の造礁性サンゴ群落が見られる地域での調査を除いて，まとまった調査はしていない．ただし，播磨灘については香川県水産試験場から，紀伊水道については徳島県水産試験場から大量の標本をご寄贈いただいた．これらの標本の整理が今後の課題である．

なお，登録作業の終わった標本は原則として貸出可能である．担当者が筆者一人ということもあり，作業がなかなか進まないのが悩みの種であるが，遠慮なくリクエストしてほしい．それから，決まった制度としてあるわけではないが，当館を滞在利用することもできる．ただし，来ていただいたからにはゼミで発表していただく習わしとなっているので，よろしくお願いしたい．当館のように地理的に隔離された場所では，マンネリ化を防ぐために，外部の風を少しでも多くいれることが是非必要である．

当館では，調査研究の成果の公表の場として，原則として年1回，徳島県立博物館研究報告を発行している．現在，第3号までが発行されており，第4号を印刷中である．この研究報告へは館員だけでなく，館外からの投稿も可能である．特に，地域魚類相に関する調査報告は大歓迎である．国内外を問わず，一つの河川，あるいは一つの海域や磯の短期の調査報告でもかまわない．魚類学会会員の皆様には，眠っている成果を生かすために利用していただければ幸である．気になる掲載料は，ページ数によらずタダである．別刷代は年によって若干異なるが，プレート（ただしモノクロ）を多用した100ページを越える論文でも，300部以上作って2万円程度，数10ページ程度ならばほとんど無料である．ただし，条件が2つある．一つは，その論文に使用した標本の少なくとも一部を当館へ寄贈すること．もう一つは，たとえ魚類相報告でも写真もしくは描画をできるだけ多く掲載することである．ただのリストは受け入れられない．これは，当館のコレクションを増やす目的だけでなく，標本に基づいたデータの再現性を確保すると同時に，標本の貸出を円滑にするためでもある．魚類相以外の論文も含

めて，関心のある方は編集担当者に相談願いたい．また，当館では国内400ヶ所，国外124ヶ所の研究機関と研究報告の交換をしている．部数にはまだかなりの余裕があるので，交換を希望する機関があればご連絡いただきたい．

（佐藤陽一　Yoichi Sato：〒770 徳島市八万町向寺山
徳島県文化の森総合公園　徳島県立博物館）

魚類学雑誌
41(2): 234, 1994

第10回魚類分類談話会

On the 10th Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, Oct. 29–31, 1993

京都大学農学部附属水産実験所で1993年10月29-31日に第10回魚類分類談話会が開催されたので，その模様を報告する．

10月29日（金）：午後から夕刻にかけてやって来た約20名が歓談しながらの夕食を終えてから，各自持参のスライドやビデオを映写して楽しんだ．

10月30日（土）：朝食後，9時から約1時間の水産生物標本館見学の後，午前10時から午後6時まで約30名の参加者のもとに，下記の話題提供があり，活発な論議が交わされた．

話　題

1. 宇宙・地球・海・魚・人（予報）
中村　泉（京大・水実）
2. バショウカジキとカマスサワラの比較（予報）
小山靖弘（京大・農）
3. ヨーロッパの水族館（ドイツを中心に）
谷　修一（柴島高校）
4. アカイカ漁業の漁法改良（釣る者と釣られる者の関係）　岩澤昭文 (JAMARC)・谷津明彦（遠洋研）
5. 外洋表層性魚類の南北太平洋における分布の比較
谷津明彦・中野秀樹（遠洋研）
6. 海遊館におけるマグロ類の輸送と飼育の問題について　北藤真人（海遊館）
7. 1979–1992年に五ヶ所湾で採集した展示魚類について　塚田　修（鳥羽水族館）
8. 熊野灘で採集されたイレズミコンニャクアジ（成魚）について（短報）
鈴木　清・塚田　修（鳥羽水族館）
9. 対馬暖流域におけるヒラメ再生産構造試論
田中　克（京大・農）
10. サバ型魚類の尾鰭と尾柄隆起縁
中村　泉（京大・水実）

10題の話題が提供され，熱心な質疑応答があり，時間制限で議論できなかった分は，夜の懇親会へと持ち越された．午後7時から懇親会が開かれ，久しぶりに集った魚屋達の話は秋の夜長につきることがなかった．

10月31日（日）：朝9時からせりの始まる京都府漁連西舞鶴魚市場の見学を終え，次回の再会を約束して，11時過ぎに現地解散した．

京大水産実験所に新しい水産生物標本館が建設されたことを契機に始められた「魚類分類談話会」も回を重ねて第10回を数えるに到った。最初は関西を中心に，ほぼ全国から参加者があり，参加者数は約50人に及んだこともあったが，ここ数年は関西を中心に時々他の地区の人も参加し，ほぼ30人前後の参加者で推移している．

談話会と銘打っているように，通常の学会やシンポジウムのように格式ばらないで，できるだけ気楽に，未完成でもとにかく話題の核になるようなことがあれば提供していただき，それをもとに議論をすると言う方針で，この会は進められて来た．水族館に勤務する人々，水試や水研の研究者など，実際に生きている魚類に接する機会の多い人達の参加が多いので，話題や議論が極めて現実に即している．筆者のように常日頃，液浸標本を扱うことの多い，ホルマリン魚類学徒はこの会から得るところが非常に多い．

我々が論文や教科書で習って常識として当たり前と思っていることも，現実と照らし合わせてみると，一致しないことも時々現出して来た．よく調べてみると，既成概念を改めねばならないことも，しばしば出て来ている．このようなことの積み重ねが，大きく言えば，魚類学の発展に寄与するところもあるのではないかと考えられる．

11回以降もこの会をできるだけ長く続けて行きたいと思うので，広く魚類学会会員の皆様のご参加をお願いする．

（中村　泉　Izumi Nakamura：〒625 京都府舞鶴市長浜
京都大学農学部附属水産実験所）

財団法人日本科学協会　笹川科学研究助成 1995年度募集のお知らせ

財団法人日本科学協会は，昭和63年度から人文学，社会科学，自然科学（医学を除く）及び境界領域の分野の研究を行う若手研究者を対象に，研究助成を実施しています．この度，笹川科学研究助成は，21世紀に向かって真に質の高い社会の実現のため，萌芽性，新規性及び独創性のある内容をもった研究に対して，1995年度の助成先を募集します．応募の申請様式などについては，下記へご連絡下さい．なお，応募期間は1994年9月1日（木）～1994年10月31日（月）となっています．

記

〒105 東京都港区虎ノ門2-9-16　日本消防会館3階
（財）日本科学協会　笹川科学研究助成係
TEL (03) 3502-1931/FAX (03) 3580-8157

会　記・Proceedings

魚類学雑誌
41(2): 235-240, 1994

日本学術会議だより No. 33（1994年6月）

5月25日から27日までの3日間，第118回総会が開催された．同総会では，「新しい方式の国際研究所の設立について（勧告）」，「公的機関の保有する情報の学術的利用について（要望）」，「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言（声明）」が採択された．

会員異動 (1994.3.1-1994.5.31)

入　会

個人会員

青木　稔　Aoki, Minoru
（所属）（有）青木洋書
〒156 世田谷区松原1-58-14　☎(03) 3322-2371
（自宅）〒156 世田谷区松原1-58-14☎(03) 3322-2371

荒井将人　Arai, Masahito
（所属）北海道大学水産学部水産動物学講座
〒041 函館市港町3-1-1　☎(0138) 40-5540
（自宅）〒041 函館市港町2-3-3　えすぱー A3
☎(0138) 40-6734

有田康一　Arita, Koichi
（所属）近畿大学農学部水産学科
〒631 奈良市中町3327-204　☎(0742) 43-1511
（自宅）〒560 豊中市上野東3-4-25　☎(06) 854-5720

出羽慎一　Dewa, Shinichi
（所属）鹿児島大学大学院水産学研究科
〒890 鹿児島市下荒田4-50-20　☎(0992) 86-4111
（自宅）〒890 鹿児島市下荒田4-21-2
堀端アパート102　☎(0992) 59-5319

土居正典　Doi, Masanori
（所属）土居技術士事務所
〒353 志木市幸町1-8-40-804　☎(048) 473-4403
（自宅）〒353 志木市幸町1-8-40-804
☎(048) 473-4403

福山賢仁　Fukuyama, Kenjin
（所属）サンコーコンサルタント（株）環境技術部
〒136 江東区亀戸1-8-9　☎(03) 3683-7111
（自宅）〒133 江戸川区西小岩1-22-1-705
☎(03) 3650-5082

羽田春義　Hada, Haruyoshi
（所属）（株）中国環境指導センター
〒733 広島市西区乙斐本町3-13-16
☎(082) 272-9000
（自宅）〒733 広島市西区古江東町23-40-205
☎(082) 272-3743

濱島尚子　Hamashima, Naoko
（所属）鹿児島大学水産学部水産学科
〒890 鹿児島市下荒田4-50-20　☎(0992) 86-4111
（自宅）〒890 鹿児島市西田2-14-20
☎(0992) 54-4622